資料紹介

滋賀県雪野寺跡の測量調査

岡村秀典
菱田哲郎

湖東平野を貫いて琵琶湖に注ぐ日野川の中流右岸に聳えたつ雪野山（標高三〇八・八m、通称竜王山）山塊の西南麓に雪野寺跡は位置する。滋賀県蒲生郡竜王町大字川守字六路、現在の竜王寺および天神社の境内に所在し、地元では付近を野寺と呼んでいる。

一九二〇年ごろから瓦や塑像などの出土が注意をひき、一九三四・五年、柏倉亮吉を担当者に日本古文化研究所が発掘調査を実施した。両年にわたる前後三回の調査で判明した建築遺構は、乱石積み二重基壇をもつ塔跡のみであったが、報告書①のなかでは瓦や塑像の散布状況から、ほかにも建物が存在したことが推測され、法起寺式伽藍配置の可能性が指摘された。遺跡はその後、落葉に厚く覆われ、遺構面や発掘時の排土がそのままの状態で保存されてきた。一九八三年三月二八日には滋賀県史跡に指定されている。

さて、一九三四・五年の発掘による出土遺物は柏倉を中心に京都大学において整理され、一九六七年、瓦、塑像、風鐸などの出土品が一括で京都大学文学部博物館に寄贈された。京都大学文学部考古学研究室では、一九八七年秋の文学部博物館公開展示にむけて収蔵遺物の総合研究をテーマとした研究をすすめ、雪野寺跡の出土遺物については、全国的にみても質、量ともに豊富な塑像自体の分析とその出土遺構の性格を把握することを重要な課題のひとつとして設定した。日本の古代寺院において、塑像が堂塔内部の構成要素として重要な位置を占めていたことは法隆寺の例から明からであり、近年、少しずつ増加している塑像の出土例を集

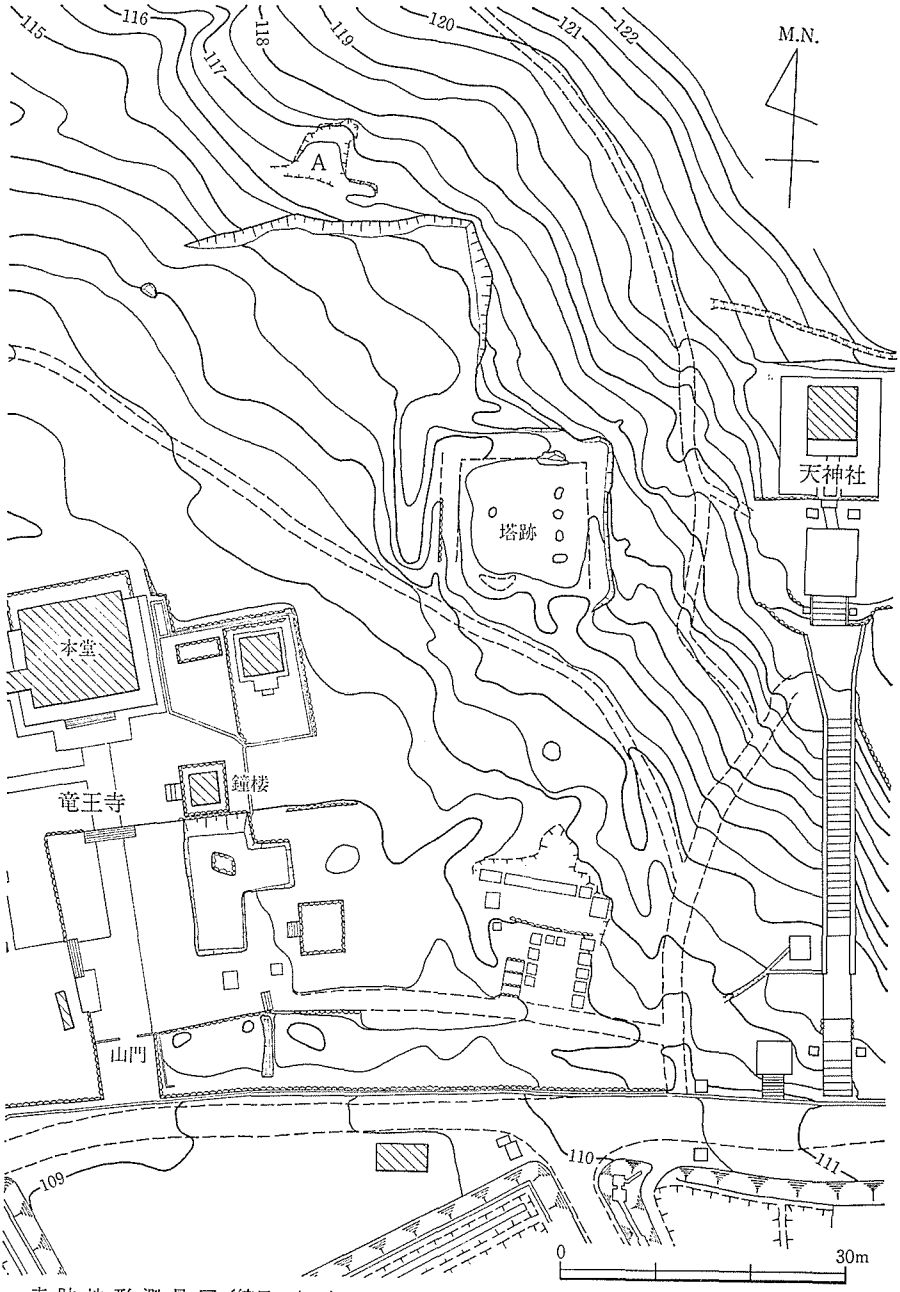
成する作業が試みられるようになってきたが、[2] 建物との関係のわかる出土状況が実際に発掘調査において確認されたことはこれまでほとんどなく、雪野寺跡も例外ではなかった。また、七世紀後半の創建時と考えられる軒瓦は、同じく収蔵品となっている京都府高麗寺跡と共通する川原寺式であり、伽藍配置も共通する可能性があるため、それらを総合的に把握していく必要があった。しかし上述のように、伽藍配置をはじめ遺跡全体の状況が十分に明らかではなく、研究の基礎となるべき地形測量および寺域範囲の確定すらこれまで全く行われてこなかったことから、当研究室では学生の実習をかねて、一九八六年一二月一一日から一九日まで、一九八七年三月一六日から一九日までの二回にわけて地形測量を実施した。参加者は次の通りである。

五十川伸矢　岡本健一　岸本和幸　岸本直文　桑原久男　高善雄　高橋克寿　千葉豊　難波純子　西脇対名夫　廣川守　福勢千鶴子　不破隆　森下章司　矢野健一　吉井秀夫

また測量の実施にあたっては、竜王寺住職仙波玄俊氏、川守区長森島小市氏のご快諾を得たほか、町史編纂室小森太三郎氏、滋賀県教育委員会丸山竜平氏、竜王町教育委員会、滋賀県教育委員会文化財保護課、京都大学埋蔵文化財研究センターより数多くのご援助を賜わった。厚くお礼申し上げたい。

今回の測量調査では、一九三四・五年の調査以来、埋め戻されずに露出している塔跡から始め、周辺の地形や現在の竜王寺の範囲を手がかりに、約一五〇m四方について地形図を作成した。コンターは五〇cm間隔とし、塔跡周辺の伽藍推定範囲においては二五cmコンターを加えた。現地は、東北から西南にかけて傾斜する斜面にあたり、ちょうど塔跡を境に西側と南側とが平坦地を形成する地形となっている。

塔跡は、報告書の記載どおり、乱石積みの基壇で東西、南北とも一三m余を計り、西面および南面では、さらに一m外側に段を持ち、基壇の側縁と併行に整然と並ぶ石列が確認できた。礎石は、東の側柱列三個、西の側柱列一個が遺存し、南北の柱間寸法は約二・四m等間である。外側の礎石列から基壇の端までは三・〇mである。礎石列の方位は、磁北から西に二度振っているが、基壇の縁辺とは微妙に異なっている。この基壇の西側と北側にみとめられる高まりは、発掘の際の排土と考えられ、報告書にみられる基壇中央の大きな穴も排土によって埋め立てられたものと考えられる。なお、基壇の東側と北側は崖状を呈し、その崖面からは瓦が露出している。塔跡でみた寺院創建期の地表面が続いていると、この周辺はかなり大量の土砂の下に埋もれていることが推測できる。塔跡の東や北で比高が高くなっているのは、おそら



寺跡地形測量図（縮尺 1/800）

く東北から流出した土砂のためであろう。

塔跡の東北にあるA地点では、発掘時に塑像が多量出土したことから堂宇の存在が推測されていた③が、今回作成した地形図では、その痕跡はみとめられない。A地点には、堂宇の焼失後に塑像を集めて埋めたという意見④もあり、建物以外の可能性についても考える必要がある。また、報告書において金堂跡に比定された本堂の北側についても、地形図からは明確な証左を得ない。現状ではかなり平坦な面が広がっているが、瓦や礎石が掘り出されたという記録⑤もあるので、基壇が削平された可能性もあろう。

塔跡の南側、竜王寺境内の東側にあたる部分は、一角が墓地として利用されているほかは、雑木の生い茂る荒れた状態で放置され、報告書でもほとんど触れられなかったのであるが、寺域の範囲や伽藍配置を推定するうえで重要な部分と考え、測量の際に注意したところ、塔跡から二〇m南、鐘楼の東側で、高さ五〇cm弱の東西方向の高まりがみとめられた。その南側の縁には石列が約一〇mにわたって存在する。その方位は、塔跡でみた雪野寺の方位とはやや異なっているが、塔跡基壇の裾の石列と組み方が似ている。この石列の西の延長は、池の北岸や段の上端など、現在の境内の施設のラインによく一致し、さらに西に延びていたことが窺える。東側は、撹乱坑や現代の瓦の堆積などにより、明確では

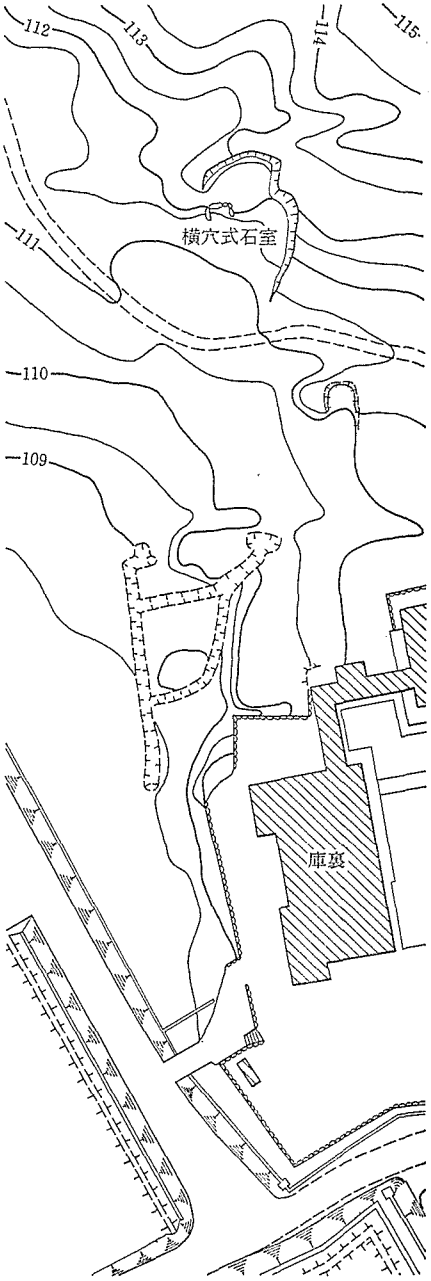


図1　雪野

ない。方位の不一致という問題が残るが、この東西方向の高まりが塔跡の南二〇mに位置する点を考えると、これが雪野寺の回廊の痕跡を示す可能性が高いと判断できる。先にも触れたように、本堂の北側で礎石や瓦が掘り出されたことが報告書に述べられ、塔と金堂が東西に並ぶ法起寺式の伽藍配置が推測されている。今回新たに確認した東西方向の石列をともなう高まりが回廊跡とすれば、柏倉亮吉の推測とも一致することになる。この点については、発掘調査による遺構の確認を経て明確にすべきであろう。

地形図からわかるように、現在の竜王寺の建物の方位は、塔跡でみた雪野寺創建時の方位よりも西に傾いているけれども、その南辺の石垣や道路のラインは、むしろ雪野寺創建時の方位に近い。その石垣の北側では、幅三～四m、高さ〇・五～一mの東西に走る土塁状の高まりが、山門から石垣に沿って境内の東端まで五〇m余にわたって存在する。その規模や方位から、あるいは雪野寺の南面大垣に関わる遺構の痕跡かと推察された。また、この土塁状高まりから北は、比較的平坦で比高差が少ないのに対し、その南側では崖状に大きな段差があり、雪野寺造営にともなう整地の範囲の南限と考えられる。

寺域の範囲の問題については、南辺について南面大垣と推定しうる手がかりが得られたものの、他の部分はそれほど明確でない。北辺や東辺は、おそらく大量の土砂に埋もれていると考えられ、地形には痕跡をとどめていない。ただ、竜王寺の東に接して位置する天神社の参道が雪野寺跡の方位によく一致し、そのすぐ東側が急な傾斜地になっていることは、寺域の東限をあらわすものと理解できよう。西辺についても、消極的ながらも若干の手がかりがある。塔跡から西北西六五mの地点に存在する横穴式石室がそのひとつである。雪野寺の創建時にはすでにこの古墳が存在し、寺域のなかにそのまま取り込むことが考えにくいので、一応、寺域の外に位置するとみてよいであろう。また、本堂と庫裏の西側では南北方向にコンターが走り、石垣に沿って一～二mの段差がみとめられ、横穴式石室の存在とあわせて寺域の西辺を限定することは可能であろう。寺域の東西をこのように決め得るならば、その距離はおよそ一〇六m、約一町が確保されることになる。同様に南面大垣推定遺構から北に一町をとれば、ちょうど塑像の出土したA地点のすぐ北側にあたることを付記しておきたい。

雪野寺跡は、一九三四・五年の調査の直後から、寺域全般にわたる発掘調査の必要性が説かれていたが[6]、その後半世紀もの間、ほとんど調査されずに今日に至っており、塑像の出土地点の性格や金堂跡の存否など、報告書のなかで設定された課題もいまだ解

決されないままである。一方、雪野寺跡の周囲では、雪野山を越えた反対側の山麓、現在の蒲生町横谷で、雪野寺創建時の瓦を焼成したと考えられる窯跡が確認され、⑦また、雪野山麓の群集墳の分布調査が精力的に進められており、⑧遺跡をとりまく環境がかなり明らかになりつつある。今回の測量調査では、塔跡の南側や南辺地域での所見から、回廊や南面大垣などの遺構の存在する可能性が推測され、寺域の範囲についても、基礎的なデーターをまとめることができた。その結果、解明すべき新たな課題も付け加っている。雪野寺跡は、完好な塑像が大量に出土したという、きわめて稀な例であるばかりでなく、遺跡自体がかなり良好な遺存状態にあることが想定され、その調査が古代寺院の研究にとって重要な知見をもたらすことが予測できる。また、奈良時代の様式を備えている梵鐘⑨や、周辺に散在する古墳時代後期の群集墳と雪野寺との関係、さらには、平安時代以降の仏像を多数擁する現在の竜王寺との歴史的関係など、検討を加えていくべき課題は多い。今後は、発掘調査によって寺院の構造を明らかにしていく一方、考古学のみならず、建築史、美術史、仏教史などを含めた幅広い見地から総合的に研究を進めていく必要がある。

① 柏倉亮吉『雪野寺跡発掘調査報告』（『日本古文化研究所報告』第七一九三七年）。

② 坪井清足・猪熊兼勝・小林謙一・井上和人編『日本と韓国の塑像』（『飛鳥資料館図録』第一四冊　一九八五年）。

③ 柏倉亮吉　注1　一五頁。

④ 坪井清足ほか　注2　五六頁。

⑤ 柏倉亮吉　注1　一五頁。

⑥ 小林行雄「新著　雪野寺跡発掘調査報告」（『考古学』第九巻第一号一九三八年）、同「紹介　雪野寺跡発掘調査報告」（『史林』第二三巻第二号　一九三八年）。

⑦ 奈良国立文化財研究所上原真人氏が一九七四年に踏査され、雪野寺跡例と同じ文様をもつ川原寺式軒丸瓦や須恵器の出土を確認された。われわれも調査の期間中、現地の踏査を行い、瓦の散布を確認している。上原氏のご教示に感謝する。

⑧ 丸山竜平「原始・古代の竜王町」（『竜王町史』上巻　一九八七年）。

⑨ 坪井良平「近江竜王寺鐘」（『考古学』第六巻第一号　一九三五年）、同『日本の梵鐘』（一九七〇年）六四頁。

岡村秀典（京都大学文学部助手）
菱田哲郎（京都大学文学部助手）